

左の文章をよく読んで、後の設問に答えなさい。

学校を卒業して、社会に出ると、毎日が本当にわからないことだらけです。どんなふうに仕事をすればよいのか。将来の人生設計をどうすればよいのか。悩みは尽きません。

「筋道を考えてよく計画をし、行動しようとしても、作戦どおりにいかないことが、しょっちゅうです。そもそも作戦や戦略を立てて何かをすることが成功するのは、社会の仕組みやルールがよく整備されていて、その中身を完璧に理解できているときだけです。でも社会はそれほど完璧ではない。筋道を立てようとしても、立てようがないのです。

だとすれば、よくわからない社会を毎日生きる上で、もつとも大切なことはなにか。それは「わからない」ということで、簡単にあきらめないことです。逃げ出さないことです。「わからない」から不安だとか、つまらないと思わない。むしろ「わからない」からおもしろいと思えるかどうかです。

そもそも毎日の生活で幸福に生きているかを点数ではかっただとして、自分は百点満点だといえる人はどれくらいいるのでしょうか。でも百点でないから駄目だということでもない。五一点以上をなんとか取る。赤点さえ取らなかつたら、前にはじゅうぶん進めます。いや、たまに落第したって、かえって、それが後からふりかえってみると、長い目でみてよかつたなんてこともある。学校の勉強と同じです。

わからないということに慣れる練習をしているというのは、考えてみると、教室での勉強にかぎったことではありません。部活動だって、そうでしょう。バスケットボール部でもっとシュートがうまくなりたい。でもどうすればもっと成功率を高くできるか、わからない。わからないから、あきらめずにコツコツ練習する。吹奏楽部だって、もつとうまく演奏できるようにになりたいから、練習したり、先生や先輩、仲間のアドバイスを真剣に聞いたりする。中学校に限らず、学校での生活はすべて、わからないことに慣れる練習なのです。

希望も同じです。希望なんて、考えても考えても、つかみどころのない、わからないものです。でもわからないからこそ、おもしろい。希望という視点から社会を考えることで、新しい見方ができる可能性があるからです。

希望学をはじめたときに、ある人から「希望学の最終的な落としどころはどこですか」ときかれたことがあります。勉強にはどこの大学へ入りたいとか、学問にも論文をどこの専門雑誌に掲載けいさいしたいといった、あらかじめ目標やゴールを設定して行う場合があります。でも、希望学は、最初から落としどころなんて、考えてもいませんでした。やりながらどこに向かうかを考えるというのが、正直なところでした。でも、新しいことを始めるためには、それでよかつたんだと、今は思っています。

私自身が希望学から学んだ一つは、「わからない」から逃げないことの大切さでした。そしてそれこそが、勉強や学問の意味だということを、あらためて思い知らされた気がしています。

（玄田有史『希望のつくり方』岩波新書、二〇一〇年）

【設問】 著者は「希望」について、「わからない」から「おもしろい」と述べている。本文をふまえて、あなた自身の「わからない」体験とそれを克服した経験を具体的に述べた上で、「希望」についての考えを述べなさい。解答は六百字以上八百字以内とする（句読点などの記号や空白も字数に含む）。